

## 米国民民主党支持者が2004年大統領選候補者に下した評価の検討 —社会的アイデンティティ理論の観点から—<sup>1) 2)</sup>

### The Evaluation of the Candidates for the 2004 Presidential Election by Democratic Party Supporters : From the Social Identity Perspective

大石 千歳

社会的アイデンティティ理論 (Social Identity Theory ; Tajfel, 1987) によれば, 社会の構成要素である人種・民族・国籍・性別・宗教・職業・出身学校・社会階層などはすべて大規模な集団の一種と捉えられ, 社会集団 (Social Group) と呼ばれている。

社会的アイデンティティ理論によって, 人間が誕生の瞬間から様々な社会集団の一員としての属性を背負っていることや, 個人への評価や好き嫌いが, 所属集団に大きく規定されるということが主張された。この見解はヨーロッパの実験社会心理学の世界で, 数限りない実験研究によって立証されてきた。その代表的な例が, 社会的アイデンティティ理論発生の端緒となった研究 (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971) である。

Tajfelら (1971) では, 実験参加者をささいな基準で一時的に集団に分ける, 最小条件集団パラダイム (minimal group paradigm) が用いられた。最小条件集団パラダイムとは, コイン・トスや抽象画の好みによって, 実験のための一時的な集団分けを行う方法をいう。Tajfel et al. (1971) では, このように設定した集団分けに基づいて, 実験参加者に内集団 (ingroup: 所属する集団) と外集団 (outgroup: よその集団) の成員に報酬を分配する課題を行わせた。報酬の分配には, 分配マトリックス (Tajfel's distribution matrices) と呼ばれる方法が用いられた。この方法は, A集団の〇〇番さんとB集団の××番さんに, 報酬に見立てた合計点 (例えば15点。マトリックスには何種類かある) のうち何点ずつを分配したいかを選択する方法で

ある。Tajfel et al. (1971) では, 分配マトリックス指標によって, 外集団成員と比較して内集団成員が厚遇される “内集団ひいき (ingroup favoritism)” の発生が示された。

大石 (2005) でも述べられているが, Tajfelら (1971) の結果を現実社会での出来事と重ね合わせると, 第二次世界大戦中のヨーロッパにおける, ナチスのホロコーストが連想される。戦争という状況は, 国家という社会集団が他の国家と競争状態に置かれ, しかもその競争に国家の存続が賭けられた危機的状況である。社会的アイデンティティ理論の観点からは, このような状況下で起きた集団間差別としてホロコーストを捉える視点をもちうる。ユダヤ人であるという集団成員性のみを基準に, 個人がどんな人物であるかを一切問われず, 殺戮の対象とされたこの出来事は, 自身もユダヤ人でありホロコーストの辛酸を舐めたタジフェルが (Turner, 1996), 社会的アイデンティティ理論を生み出す着想の源泉でもあった。

一方, 社会的アイデンティティ理論に基づく集団研究では, 所属する社会集団から得る社会的アイデンティティ (Social Identity) を傷つける員が, 他の成員から低く評価され, 集団から心理的に切り捨てられるという, “黒い羊効果” (black sheep effect : Marques, Yzerbyt, & Leyens, 1988) が報告されている。

大石 (2002) では, 1998年のサッカーのFIFAワールドカップ・フランス大会の例を挙げて, 黒い羊効果を説明している。ワールドカップ・フランス大会では, 日本はアルゼンチン, クロアチ

ア、ジャマイカと対戦した。試合の日が近づくにつれ、街中でサッカー日本代表のユニフォームを着ている人を多く見かけるようになり、ワールドカップの期間中、多くの日本人が日本代表の試合をきわめて熱心に応援した。ワールドカップの本戦で期待されながら得点できなかった選手が、空港で水をかけられる事件まで起きた（1998年3月31日、日刊スポーツ記事）。

このようなことが起きたのは、日本という国家の一員（国民）であるという社会的アイデンティティを、日本代表とそのサポーター（サッカーファン）が共有しているため、日本代表の勝利がサポーターの社会的アイデンティティ高揚動機を満たすからである。しかし、サポーターの人々が常日ごろから熱狂的な愛国主義者かという、そうでもない。ワールドカップ期間中は、国別対抗という状況で他国と日本が勝ち負けを争うので、特に日本人であることを強く意識させられる。このように、人は他の集団との比較・競争状況では、自分の所属集団を特に強く意識する。このような状況を、“内外集団の比較の文脈がある状況”という。

黒い羊効果は、内集団成員であればどんな人物かわからなくても厚遇されるという内集団ひいきとは一見矛盾するかに見える。しかし黒い羊効果も内集団ひいきと同様に、内集団から得る社会的アイデンティティを維持高揚したいという動機が引き金となって発生する現象である。内集団ひいきではなく黒い羊効果のほうを発生させる要因とは、評定対象となる内集団成員が集団の足を引っ張り、社会的アイデンティティを傷つける存在であること、内外集団の比較の文脈があること、内集団への強い同一視があることである。ワールドカップの例でいえば、外国と国の誇りをかけて勝敗を争うことと、サポーターに日本人としての強い愛国心が（一時的にせよ）高まっていること、そしてそのようなサポーターの期待を結果として裏切った形になった選手がいたこと、という要因が揃ったため、選手が空港で水をかけられたといえるのである。

ところで、従来の内集団ひいきおよび黒い羊効果に関する研究の多くは、人工的な集団設定による実験研究であった。内集団を研究参加者の所属学科（法学科）とし、外集団をライバル学科（哲学科）とするなど（Marques & Yzerbyt, 1988）である。他の例を挙げると、Biernat, Vescio, and Billings (1999) は、カンザス大学の白人女子学生を被験者とし、内集団を白人、外集団を黒人とした。実験は、言葉を使ったゲームの相手（サクラ）を評価するものであった。Marques, Abrams, Paez, and Martinez-Taboada (1998) は、犯罪に関する記事の登場人物を評価する際の、属性中心の帰属スタイル、状況中心の帰属スタイルというカバーストーリーを用いて、実際には最小条件集団を形成しての実験を行っている。松崎 (1999) は、K音楽大学学生を被験者とし、内集団をK音楽大学、外集団をT音楽大学として実験を行った。集団成員の提示方法は、優等生および劣等生に関する事例文章を提示する方法をとった。杉本・本間・船山 (1996) では、大学生女子を被験者とし、大学生の就職活動における面接場面と称して、ビデオ映像によって面接を受けている女子学生をターゲット人物として提示し、その望ましさを11項目で評定した。Branscombe, Wann, Noel, and Coleman (1993) では、学生新聞の記事を提示して、それを書いた記者を評価させていた。これらの研究は、性別を扱ったもの以外はいずれも、所属する学校や学科を内外集団に設定したもので、現実の社会問題に根ざした内外集団の関係性を用いた研究ではなかった。

しかしながら、社会心理学が社会における諸問題を心理学的に解明する学問である以上、黒い羊効果研究においても、具体的な社会問題の中にある黒い羊効果を発見し、その発生メカニズムを検討するという研究方法が望まれる。内外集団の設定を行う際には、内集団と外集団の比較の文脈が存在し、内集団の社会的アイデンティティが顕在化されて、内集団成員のなかにこれを維持・高揚しようとする動機が発生していることが重要である（大石・吉田, 2001）。この条件を満たすには、

集団どうしの関係性やその背景にある歴史的経緯などが重要で、研究実施時の集団が置かれた状況が、黒い羊効果の発生を予測させる状況になければならない。

社会的アイデンティティ理論は、人種・民族・宗教・国家といった社会集団の対立や宥和に関する長い歴史を持ったヨーロッパを中心に発展した理論である。本邦の社会状況に関しては、社会集団の対立の構造はヨーロッパほど一目瞭然なわけではない。一方米国では、移民国家としての歴史、公民権運動やアフターマティブ・アクションなどに象徴される人種問題、二大政党制による国論を二分する大統領選挙など、社会集団の対立の構図は明確である。

米国二大政党制に関しては、Matthews and Dietz-Uhler (1998) が、民主党と共和党の政治広告（と称した架空の題材）を用いた黒い羊効果の研究を行っている。この実験では、大学生男女を被験者とし、民主党か共和党のうち被験者が支持する党を内集団、もう一方の党を外集団とした。被験者は、ポジティブもしくはネガティブな内容を含む、どちらかの党の上院議員の政治広告を提示され、その議員への感情、その議員に投票したいかなどの項目により議員の評価を行った。その結果、外集団の候補者については、広告内容がポジティブでもネガティブでも評価が変わらなかったが、内集団の候補者については、広告内容がポジティブだと高く、ネガティブだとよその政党の候補者よりさらに低く評価された。すなわち、黒い羊効果の発生が確認された。

本研究は、Matthews and Dietz-Uhler (1998) の研究結果を受けて、米国の二大政党制を内外集団の設定として活用し、実際の大統領選挙というさらに具体的な社会の現実に根ざした状況設定を生かして、黒い羊効果の発生状況の検討を行うものである。2004年11月に行われた大統領選挙では、イラク問題が争点となるなか共和党のブッシュ大統領が再選され、民主党のケリー候補は惜しくも敗れるという結果に終わった。黒い羊効果を検討するための評定対象人物は、米国二大政党制にお

いて保守系とみなされている政党、すなわち共和党の大統領候補（のち当選し現大統領）のジョージ・W・ブッシュ氏、およびリベラル系とみなされている政党<sup>3)</sup>、すなわち民主党の大統領候補であったジョン・ケリー氏である<sup>4)</sup>。

本研究の舞台となるサンフランシスコは、米国においてはアジア系住民の非常に多い土地柄であり、ラティーノ（ヒスパニック系）の人々も多い。また、歴史的にみても同性愛に対する寛容性も高いことで有名である（『イエルバブエナ通信』2005年3月号などを参照）。このような人種の多様性、性的指向における多様性も手伝ってか、サンフランシスコでは、リベラルな価値観を持つ人が多く、民主党支持者が多いといわれている。本研究では、このような特徴を持つサンフランシスコを舞台に、内集団を民主党とその支持者、外集団を共和党とその支持者に設定する。まず黒い羊効果の発生そのものに関する、以下の仮説1を検証する。

仮説1：民主党のケリー大統領候補は、民主党支持者たちからは、共和党およびブッシュ大統領に大統領選挙で敗北した責任を負う立場として、低く評価されるであろう。

この仮説1は、黒い羊効果の発生に関する最も基本的な内容である。社会的アイデンティティ理論の観点からの、内集団ひいきと黒い羊効果の関係性についてはすでに述べた。また、大石 (2003) に紹介された黒い羊効果に関する国内外の先行研究によって、内集団の劣った成員、逸脱者、仲間の誇りを傷つけるも者などが低く評価されるという仮説1の方向性は、繰り返し支持されている。本研究に関しては、とりわけMatthews and Dietz Uhler (1998) の結果から考えて、ブッシュ大統領の再選を許してしまったケリー候補に対して、民主党支持者は民主党を支持するがゆえに、低い評価を与えると予測されるのである。

加えて本研究では、新たな視点として、自己概念の不確実性低減説 (Uncertainty-Reduction Hypothesis, Hogg & Mullin, 1999) を導入する。社会的アイデンティティ理論に基づく集団研究は、今日では様々な発展的な理論や仮説を生み出して

おり、その一つが、この説である。不確実性低減仮説によれば、人は所属集団への同一視 (identification) によって、自分が何者であるかを定義し、ぼんやりと不確かであった自己概念をより明確なものにするという。人々は、世界やその中にいる自分を確証し、どう振舞うべきかを知り、自信を持ちたいという動機を持つ。不確実性は人生をコントロール不能にするので、不確実性を低減する動機が発生し、自分にとって重要な問題においては特にそうであるという。

Grieve and Hogg (1999) では、最小集団パラダイムと分配マトリックスを用いたオーソドックスな実証方法によって、主観的不確実性低減動機が高いほど、内集団ひいきが強いという結果を示した。しかしGrieve and Hogg (1999) の実験における不確実性は、「課題の不確実性」であり、「状況の不確実性」であった。そこで本研究では、Grieve and Hogg (1999) とは全く異なる観点に立って、自己概念の不確実性を低減させようとする研究参加者自身の志向性が強いほど、黒い羊効果が強く発生するか否かを検討する。自己への没入傾向 (Self-Preoccupation: Sakamoto, 1998) は、この自己概念を確かなものにしたいという動機のあらわれとして捉えることができる。なぜならこの現象は、自分自身に注意の焦点を集中し、他を省みないほど自分のことばかり考えてしまうというものであるからである。以上の議論により、仮説2が導かれる。

**仮説2：自己への没入傾向が強いほど、黒い羊効果が強く発生するであろう。**

さらに本研究では、失敗を恐れる傾向の強さが黒い羊効果に及ぼす影響を検討する。自分が失敗を犯すことを強く恐れるのは、失敗することで自己の名誉やアイデンティティに傷がつくことを恐れるためと考えられる。言い換えれば、自己のアイデンティティを維持・高揚したいという動機の強さが、人を失敗恐怖に駆り立てるともいえる。そして失敗によるアイデンティティの脅威を恐れる人は、社会的アイデンティティの源泉である内集団の成員の失敗にも厳しいのではないだろうか。社会的アイデンティティ理論の発展形である自己

カテゴリー化理論 (Turner, 1982) では、内集団への同一視が強い場合は、脱個人化 (depersonalization) が起きて、内集団成員は個人差を問われず皆交代可能な存在として認知されるようになるという。内集団から得る社会的アイデンティティを重要視しているほど、自分以外の内集団成員の失敗に対しても、非寛容になるのではないだろうか。ここから、仮説3が導かれる。

**仮説3：失敗を恐れる傾向が強いほど、社会的アイデンティティへの脅威を重く受け止め、黒い羊効果を強く発生させると予測できる。**

加えて本研究では、内集団成員への評価に関して社会的態度が及ぼす影響力について、社会的優位性志向 (Social Dominance Orientation: Pratto, 1994) を取り上げる。社会的優位性志向は、自分が所属する国家や民族、宗教、性別などの社会集団が、他の社会集団よりも優位にあることを志向する傾向である。社会的アイデンティティ理論では、人は自らの所属集団の社会的アイデンティティの維持・高揚のために集団間差別に走るといわれているが、社会的優位性志向は様々な社会集団が存在する現実社会において、内集団が他の社会集団に優越し支配的立場を占めることを求める直接的な志向性である。社会的アイデンティティ理論に基づく集団研究をより現実的な集団設定において行う、とりわけ内外集団を政党に設定する場合には、研究参加者の社会的態度の影響を外して考えるのは現実的でないといえる。特定の政党に対する支持・不支持を規定する要因として、社会的態度は重要な存在だからである。社会的優位性志向は、他の社会集団を抑圧してでも自集団の優越性と既得権を守ろうとする態度であるため、一般的には保守的な政治信念との結びつきが強いと考えられる。したがって、仮説4が導かれる。

**仮説4：民主党支持者においては、社会的優位性志向が弱いほど、黒い羊効果が強く発生すると予測される。**

## 方法

### 研究参加者と実施手続き

2005年3月に、米国サンフランシスコ市内にある州立のX大学男女学生計217名（男性52名、女性163名、無回答2名）を対象に、質問紙調査型の実験研究を実施した。

### 質問項目（本研究に関わる部分のみ、表1参照）

#### 1. フェイスシート

性別、人種、国籍、出身地、専攻学科、学年、支持政党、支持政党にとってライバルにあたる政党（ライバル政党）は何だと思ふかを尋ねた。

#### 2. 米国社会の政治的問題・人物に関する項目

イラク戦争、民主党とその大統領候補ジョン・ケリー氏、共和党とその大統領候補ジョージ・W・ブッシュ氏（現大統領）、ブッシュ大統領を諷刺した映画「華氏911」とそれを制作した映画監督（マイケル・ムーア氏）、銃規制などの31項目につき、支持する程度を7件法、および“知らない”（N/A）で尋ねた。本研究ではイラク戦争、ブッシュ支持、ケリー支持、共和党支持、民主党支持、ネーダー候補支持、マイケル・ムーア氏支持、緑の党支持、華氏911（ブッシュ大統領を批判する映画）支持を取り上げた。

#### 3. 支持政党への同一視（identification）

Brown, Condor, Mathews, Wade, and Williams

表1 本研究で測定した各指標に関する質問項目

アメリカの社会問題に関する項目 (英文にてオリジナルに作成。本研究での使用項目のみ)	社会的優位性志向尺度 (Pratto, et al., 1994)
1. How much do you support the war in Iraq?	1. I am often absorbed by thinking about myself.
2. How much do you support George W. Bush?	3. I find myself constantly comparing myself to others.
3. How much do you support John Kerry?	4. I am a perfectionist and tend to be enthusiastic about things.
4. How much do you support Ralph Nader?	5. I often dwell on bitter memories.
5. How much do you support Michael Moore?	7. Once I start thinking about myself, I find it difficult to stop.
6. How much do you support the Republican Party?	8. I often analyze myself for long periods of time.
7. How much do you support the Democratic Party?	9. Once I start thinking about myself, I have difficulty concentrating on anything else.
8. How much do you support the Green Party?	12. I often think about my abilities for long periods of time.
9. How much do you like " Fahrenheit 911" ?	15. I often ponder about what sort of person I am.
<b>集団同一視尺度 (Brown, et al. 1986)</b>	17. I often ruminate on my past experiences.
1. I am a person who considers the ___ party important.	18. Whenever I experience different emotions, (e.g., depression, happiness, etc.), I keep wondering about why I feel that way.
2. I am a person who identifies with the ___ party.	19. There are times when I ponder for a long time about the ideal type of person that I would like to become.
3. I am a person who feels strong ties with the ___ party.	20. I cannot believe that learning from failure leads to success.
4. I am a person who is glad to support to the ___ party.	<b>没入尺度(Sakamoto, 1998. うち自己没入項目)</b>
5. I am a person who sees myself as supporting the ___ party.	1. I am often absorbed by thinking about myself.
6. I am a person who makes excuses for supporting the ___ party. (e.g. you are not really willing to support your political party but you still do for any reasons)	3. I find myself constantly comparing myself to others.
7. I am a person who tries to hide supporting the _____ party.	4. I am a perfectionist and tend to be enthusiastic about things.
8. I am a person who feels held back by the ___ party.	5. I often dwell on bitter memories.
9. I am a person who is annoyed to say I'm a supporter of the ___ party.	7. Once I start thinking about myself, I find it difficult to stop.
10. I am a person who criticizes the ___ party.	8. I often analyze myself for long periods of time.
<b>失敗恐怖の測定項目 (桜井・大谷, 1997を参考に、 英文にてオリジナルに作成)</b>	9. Once I start thinking about myself, I have difficulty concentrating on anything else.
21. I might be looked down upon if I make a small mistake.	12. I often think about my abilities for long periods of time.
22. It is terrible to fail in front of others.	15. I often ponder about what sort of person I am.
23. A slight mistake is almost the same as complete failure.	17. I often ruminate on my past experiences.
24. Success is the perfect achievement.	18. Whenever I experience different emotions, (e.g., depression, happiness, etc.),I keep wondering about why I feel that way.
	19. There are times when I ponder for a long time about the ideal type of person that I would like to become.
	20. I cannot believe that learning from failure leads to success.

(1986) の尺度 (10項目7件法) を実施した。この尺度は、所属集団の欄が空欄になっており、調査の回答者に合わせた内容が入れられるようになっている。本研究の場合は、各々の研究参加者に、その空欄に自分の支持政党を入れて項目を読んでもらい、回答してもらった。

#### 4. 自己への没入傾向

Sakamoto (1998) のPreoccupation Scale (20項目, 7件法) を実施した。この尺度は、自己への没入と外的没入 (課題など、自分以外の何らかの対象への没入傾向) という2つの下位尺度を含んでいるが、本研究では自己への没入傾向を測る項目のみを使用している。この尺度は日本人によって開発されたが、原著者によって英文でも発表されており、本研究における項目の英語表記は、原著者によるものである。

#### 5. 失敗恐怖

桜井・大谷 (1997) の自己志向的完全主義尺度の下位尺度「ミスを過度に気にする傾向」を参考に、英語による4項目を作成した。英語は米国在住の心理専攻の日本人大学院生と同米国人大学卒業生 (日本語が堪能で日本の心理系大学院に進学) のチェックを受けた。項目内容は「少しでもミスがあれば、完全に失敗したのも同然である」「ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう」などの4項目である。

#### 6. 社会的優位性志向

Pratto, Sidanius, Stallworth, and Malle (1994) のSocial Dominance Orientation (SDO) 尺度を実施した (16項目7件法)。項目内容は、「ある社会集団の人々が他の社会集団の人々よりチャンスに恵まれていても構わない」「劣った社会集団は分相応な地位にいるべきだ」「ある社会集団が分相応な地位にいれば、社会問題はもっと少ないであろう」などの16項目である。

## 結果および考察

### 研究参加者の支持政党

支持政党として米国民民主党を選んだ参加者は156名 (71.9%)、2大政党における共和党を選んだのは8名 (3.7%) であった。研究参加者において民主党支持者が7割以上を占め、サンフランシスコの大学生において支持政党により内外集団を設定する際に、民主党を内集団に設定することの妥当性が確認された。この結果に基づいて本研究では、全参加者の中から民主党支持者156名のみを分析対象とした。

### 分析指標

米国の政治的問題に関して、イラク戦争、ブッシュ支持、ケリー支持、共和党支持、民主党支持、華氏911支持程度の平均値 (SD) を表2に示した。支持政党に関する同一視については、Brown (1986) らの尺度の10項目の得点を合計し、民主党支持得点を作成した。自己への没入傾向に関しては、Sakamoto (1998) の尺度のうち「自己没入」下位尺度の項目を合計し、自己没入得点を作成した。失敗恐怖に関しては、桜井・大谷 (1997) を参考に作成した4項目の得点を合計し、失敗恐怖得点を作成した。社会的優位性志向については、社会的優位性志向尺度の全項目の得点を合計し、社会的優位性志向得点を作成した。華氏911支持程度に関しては、「知らない」と答えた参加者がやや多かったため、Nが少なくなっている。

### 仮説の検証

まず、民主党支持者156名に関して、イラク戦争支持、ブッシュ支持、ケリー支持、共和党支持、民主党支持、華氏911支持の各得点と、民主党支持アイデンティティ、自己没入、失敗恐怖、SDOの各指標の相関係数を算出した (表2)。

次に、民主党支持者における「民主党支持者アイデンティティ」と「ケリー候補への評価」、および両者を媒介する要因の関連性を、AMOSによるパス解析によって検討した。仮定したモデルは図

表2 民主党支持者における各政治的トピック・人物への態度と民主党支持アイデンティティ・失敗恐怖・社会的優位性志向の相関関係

	民主党支持アイデンティティ	失敗恐怖	社会的優位性志向
イラク戦争支持	-.163(*)	.074	.317(***)
ブッシュ大統領支持	-.075	-.018	.351(***)
ケリー候補支持	.425(***)	.180(*)	.011
ネーダー候補支持	-.116	-.038	-.158+
マイケル・ムーア支持	.178(*)	.075	-.176(*)
共和党支持	-.142+	-.094	.272(**)
民主党支持	.556(***)	.168(*)	.086
緑の党支持	-.133	.008	-.065
華氏911支持	.341(***)	.157	-.384(***)

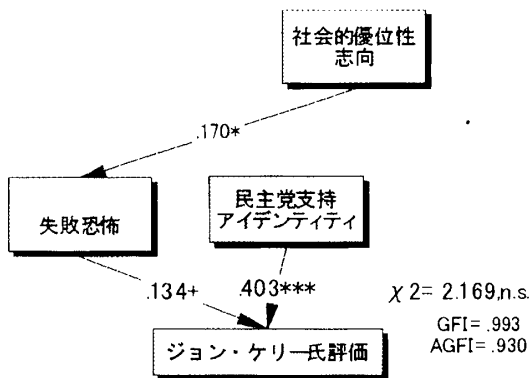


図1 民主党支持者のジョン・ケリー氏への評価に関するパス解析 その1

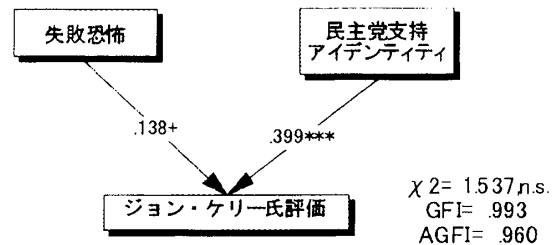


図2 民主党支持者のジョン・ケリー氏への評価に関するパス解析 その2

1 および図2の通りである。欠損値には系列平均を代入した。AMOSによるパス解析では、図1と図2のモデルを採用した。以下、仮説1~4に沿って結果を記述する。

1. 民主党支持アイデンティティの影響：仮説1の検証

項目相互の単相関の分析から、民主党支持アイデンティティ得点が高いほど、ケリー氏への評価が高く (r=.425, p<.001), 民主党自体への支持得点も高いという (r=.556, p<.001) 結果が得られた。これは、仮説1とは逆の結果であり、内集団ひいき (ingroup favoritism : Tajfel et al. 1971) の発生を示すものである。

AMOSによるパス解析の結果、図1のモデルを採用した (X2=2.169, n. s. ; GFI=.993, AGFI=.930)。民主党支持アイデンティティ得点が高いほど、ケリー氏を強く支持することが示さ

れた (β=.403, p<.001)。これは仮説1とは逆の、内集団ひいきの発生を示す結果である。また、SDOを含まないモデルである図2のパス解析結果 (X2=1.537, n. s. ; GFI=.993, AGFI=.960) から、民主党支持アイデンティティ得点が高いほど、ケリー氏を強く支持するという結果が得られている (β=.399, p<.001)。

民主党支持者としてのアイデンティティを強く持っているほど、ケリー候補を強く支持していることから、民主党支持者にとってケリー候補は、ブッシュ大統領を破ることはできなかったといえ、大統領選挙においては善戦したと捉えられている可能性がある。事実この見解の根拠として、久保 (2005) の『米民主党-2008年政権奪回への課題』の第二章を挙げるができる。久保 (2005) では、2004年大統領選挙でケリー候補は確かにブッシュ大統領に競り負けているが、民主党内外のり

ベラル派は挫折感や自責の念をほとんど感じていないという。久保（2005）によれば、民主党では1970年代以降、大統領選挙で負けるたび、選挙の敗因と将来の政策について論争が起こるのが通例であるが、2004年大統領選の際には、このような論争が起きなかったという。

## 2. 自己没入の影響：仮説2の検証

自己没入得点は、いずれの指標とも有意な相関を示さなかった。したがって、仮説2は支持されなかった。本研究では自己没入得点はいずれの指標とも有意な相関を示していなかった。しかしながら、Oishi（2005）では、自己への没入傾向と黒い羊効果の関連性が示されている。今後の研究では、黒い羊効果の発生を確認したうえで、どのような場合に自己没入の要因の影響が見られるのかをさらに検討する必要があるといえる。

## 3. 失敗恐怖の影響：仮説3の検証

失敗恐怖得点が高いほど、ケリー氏への支持程度は高く（ $r = .180$ ,  $p < .05$ ）、民主党支持得点も高かった（ $r = .168$ ,  $p < .05$ ）。パス解析では、図3、図4のパス解析ともに、失敗恐怖から民主党支持者アイデンティティへの直接のパスが有意傾向であった（順に  $\beta = .134$ ,  $p < .10$ ;  $\beta = .138$ ,  $p < .10$ ）。有意傾向であるのでさほど明確な結果ではないが、失敗恐怖が強い民主党支持者ほど、ケリー候補への支持は強いといえる。仮説3は、黒い羊効果の発生という意味では支持されなかったが、すでに述べたように黒い羊効果は、人間の刺激認知における普遍的な方向性に根ざした内集団ひいき現象の特殊な表現形である。そこで仮説3を、集団現象としての内集団ひいきを強める影響要因を検討するものと捉えれば、失敗恐怖という要因には、社会的アイデンティティ高揚動機から発生するとされる集団現象を強める影響力があったといえる。このこと自体は、社会的アイデンティティ理論の観点から集団の内外の差別や偏見を説明するという研究の観点においては、一つの重要な発見であるといえよう。

## 4. 社会的優位性志向の影響：仮説4の検証

民主党支持者であっても、社会的優位性志向が

強いほど、イラク戦争支持得点が高く（ $r = .317$ ,  $p < .001$ ）、ブッシュ大統領支持得点も高く（ $r = .351$ ,  $p < .001$ ）、共和党支持得点も高いうえ（ $r = .272$ ,  $p < .01$ ）。華氏911支持得点は著しく低い（ $r = -.384$ ,  $p < .001$ ）という相関パターンが得られた。また、社会的優位性志向とケリー候補支持得点には何の相関もみられなかった（ $r = .011$ ,  $n. s.$ ）。民主党支持者はリベラルな価値観への共鳴が強いと考えられるにも関わらず、民主党支持者において、社会的優位性志向と各指標にこの相関のパターンが見られたのは意外であった。

AMOSによるパス解析では、図3のモデルから次の結果が得られた。社会的優位性志向は、民主党支持アイデンティティに直接の影響を与えてはいなかった。しかし社会的優位性志向が強いほど、失敗恐怖傾向が強いことが示された（ $\beta = .170$ ,  $p < .05$ ）。そして先述のように、失敗恐怖が強いほど、ケリー氏への評価は高いという傾向がある。したがって、社会的優位性志向は、失敗恐怖という要因を媒介して、ケリー氏の評価を高めるという結果が得られた。以上の結果は、黒い羊効果の発生という点に関しては仮説4を支持しない。しかし仮説4についても、社会的優位性志向が内集団ひいきに影響を与えたかという観点で検討することができる。このような観点でみると上記の結果は、社会的優位性志向が内集団ひいきという社会的アイデンティティ高揚動機に基づく集団現象を強める効果を持っていることを示す結果として、興味深く解釈することができる。

## まとめ

1. 本研究では黒い羊効果は発生しなかったが、内集団ひいきは発生した。序論で述べたように、内集団ひいきは、社会的アイデンティティの維持高揚のために発生する集団現象である。黒い羊効果は、内集団ひいきに内外集団の比較の文脈、内集団への同一視、評定対象人物の特性などの条件が加わった際に発生する、特殊な表現形としての現象である。本研究では、民主党支持アイデンティ



ティを強く持っている人ほどケリー候補を高く評価するという結果が得られた。したがって本研究は、黒い羊効果ではなく内集団ひいきが発生したといえる。しかし、2004年の米国大統領選挙という現実の社会現象および実在の人物の評価に関して、社会的アイデンティティ理論に基づく集団現象の発生を確認できたという重要な意義を持つ。本研究は、これまでともすれば人工的な条件設定における実験研究に頼りがちであった集団心理研究に、現実の社会をそのまま題材にした研究を行うという、新たな視点の提案を行うものである。ただし本研究の研究参加者はサンフランシスコのある大学の学生という、米国国民全体からみればごく僅かな人々であった。本研究もサンプルの代表性という限定から自由であるとはいえない。

2. 本研究では、集団現象に対する自己没入の効果は確認できなかった。しかし、失敗恐怖が強い民主党支持者ほど、ケリー候補への支持は強い、すなわち内集団ひいきの傾向が示された。失敗恐怖という要因には、社会的アイデンティティ高揚動機から発生するとされる集団現象を強める影響力があったといえることができる。また、社会的優位性志向が強いほど、失敗恐怖傾向が強いことが示された。先述のように、失敗恐怖が強いほど、ケリー氏への評価は高いので、社会的優位性志向は、失敗恐怖という要因を媒介して、ケリー氏の評価を高めるという結果が得られた。すなわち社会的優位性志向は、内集団ひいきという社会的アイデンティティ高揚動機に基づく集団現象を強める効果を持っていることが示されたのである。これらの結果も、集団現象に関して本研究が提示する新たな視点である。

## 引用文献

- Abrams, D. 1990 How do group members regulate their behavior? An integration of social identity and self-awareness theories. In D. Abrams and M. A. Hogg (Eds.), *Social Identity Theory: Constructive and Critical Advances*. London: Harvester Wheatsheaf.
- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. M. 1950 *The Authoritarian Personality*. New York: Harper.
- 鮎戸 弘 1994 政治行動の社会心理学 福村出版.
- Altemeyer, B. 1998 The other "Authoritarian Personality". *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 47-92.
- Biernat, M., Vescio, T. K., & Billings, L. S. 1999 Black sheep and expectancy violation: Integrating two models of social judgment. *European Journal of Social Psychology*, 29, 523-542.
- Branscombe, N. R., Wann, D. L., Noel, J. G. & Coleman, J. 1993 In-group or out-group extremity: Importance of the threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 381-388.
- Brown, R., Condor, S., Mathews, A., Wade, G., & Williams, J. 1986 Explaining intergroup differentiation in an industrial organization. *Journal of Occupational Psychology*, 59, 273-286.
- Grieve, P. G. & Hogg, M. A. 1999 Subjective uncertainty and intergroup discrimination in the minimal group situation. *Personality & Social Psychology Bulletin*, 25, 926-940.
- Hogg, M. A. & Mullin, B-A. 1999 Joining groups to reduce uncertainty: Subjective uncertainty reduction and group identification. In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.) *Social identity and social cognition*. Oxford: Blackwell. Pp 249-279.
- Khan, S. & Lambert, A. 1998 Ingroup favoritism versus black sheep effects in observations of informal conversations. *Basic and Applied Social Psychology*, 20, 263-269.
- 久保文明(編) 2005 JIIA現代アメリカ7 米国民民主党-2008年政権奪回への課題- 財団法人日本国際問題研究所.

- Marques, J. M., & Yzerbyt, V. Y. 1988 The black sheep effect : Judgmental extremity towards ingroup members in inter- and intra- group situations. *European Journal of Social Psychology*, 18, 287-292.
- Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. 1988 The ' Black Sheep' effect : extremity of judgements towards in- group members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, 18, 1-16.
- Marques, J. M., Abrams, D., Paez, D., & Martinez- Taboada, C. 1998 The role of categorization and in- group norms in judgments of groups and their members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 976-988.
- 松崎友世 1999 社会的アイデンティティ理論における内集団びいきと黒い羊効果 日本社会心理学学会第40回大会発表論文集, 348-349.
- Matthews, D. & Dietz- Uhler, B. 1998 The black- sheep effect : How positive and negative advertisements affect voters' perceptions of the sponsor of the advertisement. *Journal of Applied Social Psychology*, 28, Pp 1903-1915.
- 日刊スポーツ 1998 城, 水ぶっかけられた 日刊スポーツ1998年6月30日記事.
- 大石千歳 2002 仲間だから許せない 松井 豊 (編)「対人心理学の視点」 第12章 Pp165-178. プレーン出版.
- 大石千歳 2003 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房.
- 大石千歳 2005 誰が“黒い羊”を排除するのか-社会的アイデンティティ理論による集団間・集団内差別現象の研究における個人差要因の扱いについて: レビューおよび実証研究- 東京女子体育大学紀要, 40, 29-42.
- Oishi, C. 2005 The effect of public and private self- awareness on the black sheep tendency. Poster presented at the 14th general meeting of the European Association of Experimental Social Psychology ( July 23rd. 2005 Wuerzburg, Germany).
- 大石千歳 2006 米国における支持政党を用いた黒い羊効果の検討: リベラル系政党支持者が2004年大統領選挙後に大統領候補に下した評価 日本社会心理学学会第47回大会発表論文集, 104-105.
- Oishi, C. 2007 *Black Sheep Effect from the Social Identity Perspective*. Tokyo : Kazama shobo.
- 大石千歳・吉田富二雄 2001 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響-社会的アイデンティティ理論の観点から-心理学研究, 71, 445-453.
- Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. 1994 Social Dominance Orientation : A Personality Variable Predicting Social Political Attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 741-763.
- Sakamoto, S. 1998 The Preoccupation Scale : Its development and relationships with depression scales. *Journal of Clinical Psychology*, 55, 109-116.
- 桜井茂男・大谷佳子 1997 “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68, 179-186.
- サンフランシスコ観光局/国際空港日本事務所 2005 『イエルバブエナ通信』2005年3月号.
- 杉本久美子・本間道子・船山 玲 1996 Social Identityの維持におけるブラックシープ効果 日本グループダイナミクス学会第44回大会発表論文集, 156-157.
- Tajfel, H. (Ed.) 1978 *Differentiation Between Social Groups*. London : Academic Press.
- Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 Social categorization & intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-177.
- Turner, J. C. 1982 Towards a cognitive redefinition of the social group. In H. Tajfel (Ed.) *Social Identity and Intergroup Relations*. Cambridge : Cambridge University Press. Pp

15-36.

テレビ朝日 2004 ANN緊急報道特別番組『速報！アメリカ大統領選挙！日本の運命が決まる！？ブッシュかケリーか？』（検索年月：2007年9月）<http://www.tv-asahi.co.jp/ann/special/USvote2004/>

## 脚注

- 1) 本研究は、平成16・17年度科学研究費補助金（若手研究B：研究代表者・大石千歳）の助成により行われた。
- 2) 本研究は、大石（2006：日本社会心理学会第47回大会発表）を基盤としながら加筆を行い、この発表におけるデータ分析およびこれに起因する結論の誤りを修正し、加えて新たな観点からの考察を行うものである。大石（2006）におけるデータ分析では、本研究の表2におけるケリー候補支持得点、ネーダー候補支持得点、マイケル・ムーア支持得点、民主党支持得点、緑の党支持得点、華氏911支持得点の計算時の逆転項目の処理方法に手違いがあった。
- 3) 米国二大政党の“リベラル系、保守系”とは、米国政治の歴史的経緯から一般にそう捉えられているという意味で（飽戸，1994，p292等参照）ある。したがって、当該政党が今日の米国政治における個々の政策に関してどこまでリベラル・保守であるかは、本研究のテーマではない。
- 4) 2004年大統領選挙に関しては、日本でも夥しい報道がなされたが、本稿執筆時（2007年9月）にインターネット上で確認できる資料としては、「ANN緊急報道特別番組『速報！アメリカ大統領選挙！』」<http://www.tv-asahi.co.jp/ann/special/USvote2004/>などがある。